

平家物語の女性たち

永井路子





文春文庫

平家物語の女性たち

定価はカバーに
表示してあります

1979年2月25日 第1刷

1992年3月5日 第21刷

著者 永井路子

発行者 豊田健次

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-720005-8

文 春 文 庫

平家物語の女性たち

永 井 路 子

文 藝 春 秋

平家物語の女性たち
目次

恋人たち

祇王 祇女 仏御前 9

葵女御 小督局 30

千手前 51

横笛 65

妃たち

祇園女御 79

二代后 102

人妻たち

小宰相 123

維盛の妻 137

巴 159

大納言典侍（佐） 171

二人のヒロイン

建礼門院 189

二位の尼 時子 220

おわりに 253

恋人たち

祇王 祇女 仏御前

『平家物語』の中で、いちばん名の知られた女性は何？ と聞かれたら、私はためらいなく祇王、祇女をあげたい。

が、じつをいえば、彼女たちは、『平家』本筋の女主人公ではない。彼女たちの登場する「祇王」の巻じたいが、『平家』の本筋から離れたもので、『平家』が作られた当初はなかったのではないか、とさえ言われているくらいなのだ。彼女たちはあくまでも脇役である。ではなぜ、彼女ら脇役たちが、かくも人気があるのか、まずその人間像をさぐってみよう。

彼女たちは白拍子しらびょうしだった。白拍子というのは、平安朝末のそのころもてはやされた舞姫である。その名称について『平家』は、鳥羽天皇の時から始まり、水干すいかんに立烏帽子たてえぼしで白鞆しらさやまき巻の太刀たちをさして舞った男舞であったが、のちに烏帽子、太刀をとって水干だけで舞うようになったので白拍子と言った、と説明している。水干というのは当時の庶民の男子のふだん着で、多く白で作ったから、すなわち白拍子だというのである。

また一説には、白拍子とは、語源的には無伴奏の拍子という意味だともいうが、有名な静御前は、鎌倉へ下って来たとき、鼓や笛、銅拍子の伴奏で舞っているから、現実の白拍子の舞は、必ずしも無伴奏でもなかったようだ。

ともあれ彼女たちは、こうした芸を売りものにする舞姫だった。祇王、祇女の母もどち（刀自）という白拍子だったというから、二代続いた生ッ粋の踊り手だったのであろう。

その芸のみごとに目をつけられて、やがて祇王は、時の最高権力者、平清盛の屋敷に迎えられ、寵愛をうけるようになる。それにつれて妹の祇女の人気もたかまり、当時の都を代表するスターの座にのしあがった。清盛は、どちのためにも家を作ってやり、しかも毎月米百石、錢百貫を与えたので、母子三人は物質的にもめぐまれ、しあわせな毎日を送っていた。

いわば祇王・祇女ブームである。こうなれば、彼女たちをうらやむ者、そねんで悪口を言うものが出て来るのは世の常である。

「あれはきつと、祇という名前が縁起がいいのだろう」

と、これにあやかりたいと思う連中は競って祇の字をつけたり、

「何で名前によるものですか、あれはただ前世からの約束でしあわせに生れついたのよ」

というものもあり、とかく彼女たちは都に話題をまき散らした。

ところが、三年ほどたつと、また新人があらわれた。加賀の国の生れで年は十六、ほとけ仏という名

のその少女は、たちまち都の人気者になり、

「これほどの舞の上手はなかった」

というほどの評判をとった。

こうまでちやほやされると、仏御前の望みもふくれあがる。

「私もずいぶん有名になったけれど、天下に権勢をほこる平清盛さまに呼ばれないのは残念なこと、遊び女のならい、別によばれないところへ出かけていったってかまやしない、ひとつ清盛さまのお屋敷におしかけてみましょう」

いかにも年若い、世間知らずな、現代っ子とでもいった感じの気負いにあふれた仏御前である。こわいもの知らずで、西八条にある清盛の館に出かけて行った。

が、この気負いは、もろくも崩された。せっかく出かけた仏を、清盛はすげなく追い返そうとしたのだった。

「遊び女というものは、呼ばれてから来るものだ。げんに、ここにこうして祇王がいる以上、『神』だろうが『仏』だろうが、出入りは無用、さあ、とっとと帰れ」

顔も見ずにそうわめいたのである。

天下の権力者にこう言われてしまっておしまいだ。自信をくじかれて、すごすごと引返そうとしたとき、祇王がやさしくとりなした。

「よばれもしないでもおしかけるのは遊び女のならい、しかも年もまだ若く世間知らずなのです

もの、深い考えもなく、ふっと思ひ立って出かけて来たのでしよう。すげなく帰されては、あまりかわいそうです。わたしも同じ白拍子、人の事とは思えません。舞や歌はともかくとして、ただ会ってだけおやりになったら？……」

清盛もお氣に入りの祇王の言葉に、

「まあ、そなたがそんなに言うなら……」

と、仏御前を呼びもどす氣になった。すでにがっかりして車に乗ろうとしていた彼女が、急いでもどって来ると、清盛は言った。

「どうてい会ってやる氣にはなっていなかったのだが、祇王が何を思ったか、しきりにすすめるので引見してやるのだぞ。さあここで今様の^{いまよう}一つも歌え」

今様というのは、「当世風」ということでそのころ流行していた歌のことである。当時はこれが大流行で、現代のロックかなにかのように一世を風靡^{ふうび}していた。宮廷側の最高権力者であった後白河法皇も、若いころからこの今様の大ファンで、昼も夜も歌いまくって、しまいはのどがつぶれてしまったことも何度かあったという。今残っている今様はみんなのどこかでみやびやかで、どこに人を狂わせるほどの魔力があるかと思えるが、とにかく当時は、人の心を酔わせてしまう、ふしぎな歌として、流行していたらしい。

ところで、仏御前は、今様の名手だった。

君をはじめてみるおりは千代も経ぬべしひめこ松
おまへの池なるかめをかに鶴こそむれゐてあそぶめれ

美声は聞く人々の耳をとろかし、清盛も大いに心を動かされたらしい。

「ほう、こんなに今様がうまいのなら、さぞかし舞も見ごたえがあろう。一曲見てやろうか」

もちろん舞はお手のものだ。仏御前はここでも完全に清盛を魅了してしまった。

仏が舞終ったとき、清盛の心はすっかり変っていた。ほんのちよつと前まで、

「顔も見るに及ばぬ、帰れ」

といていたのに、この気まぐれな王者は、年若な舞姫の手をとらえて離そうとしなかったのである。

「仏よ、かわいい奴。これからずっとわしのそばにいるがいい」

言われてかえって仏御前はうろたえる。

「何とおっしゃいます。私はもともとおしかけて参りました者、いったんお屋敷から出されたところを、祇王御前のおとりなしで、こうして舞をみていただくことができましたのです。なのに、私がこのまま、ここで御寵愛をうけることになりましたら、祇王御前がどう思いになるか、そう考えただけで恥ずかしくなってしまうです。どうか、早くおいとまさせて下さいませ……」

ドライな舞姫ではあったが、仏御前が考えていたのは、芸の世界だけのことだったのだ。

——天下の舞姫として、清盛にもみとめられたい。

そうは思ったが、祇王から清盛の愛を横取りすることまでは考えていなかったのである。むしろ、そんなことになったら祇王にすまない、としきりにこぼんだのだが、わがままな王者はきかなかった。

「いや、いかん、帰ることはならん。もしや祇王がいるのに遠慮してそういうのだったら、祇王を出してもいいぞ」

ますます仏御前は困ってしまう。

「まあ、そんなこと……いっしょにこの御殿にいることだって困りますのに、私一人だけがいるようになったら、それこそ祇王御前が何とお思になるか……もし私をお忘れにならなかつたら、またお呼び下さい。とにかく今日は帰らせて下さいませ」

が、それでも清盛は仏御前を帰そうとはしない。

「いや、絶対に帰ることはならぬ。かわりに祇王こそ出てゆけ」
急な心変りである。

——遊び女の常として、いつかは捨てられる時が来るのではないか……。

心の中でひそかにこう思っていた祇王ではあったが、よもやこんなに突然に迫立てられるとは思っていなかった。が、いまは全く心の離れてしまった清盛は、

「早く出よ」

しきりにそう言ってせめたてるので、部屋の中を大急ぎで取りかたづけ始めた。こんなときにも悲しみをおさえて、後で物笑いにならぬようと心づかいする祇王の姿が哀れである。『平家』はこのときの彼女を、

は（掃）きのご（拭）ひちり（塵）ひろはせ、見ぐるしき物共とりしたゝめて……。

と書いている。が、ともあれ、三年の間、清盛の寵愛をうけ、豪奢ごうしゃなぐらしをしたところだけに、いざ出てゆかねばならぬとなれば、さまざまの思いが胸にこみあげてくる。涙ながらに祇王は襖ふすまに一首の歌を書きつけて立ちのいた。

もえ出るもか（枯）るゝもおなじ野辺の草いづれか秋にあはではつべき

春になってもえ出る草も枯れる草も、みな同じ野辺の草であってみれば、どれも秋にあわないですむはずはない。——今、仏御前は寵愛をうけ、私は捨てられるけれども、いずれ野の草のようなはかない命——いつかは飽きられて枯れてゆくのだ……人間のはかなさをこう祇王は詠嘆したのである。